

日本國天皇家論

2章 法隆寺

法隆寺は日本國天皇家の菩提寺

「法隆寺」本尊「釈迦三尊像」

現在の「法隆寺」は移築された寺である。移築された寺とは594年に寺材を伐採して建立された寺である。誰が考えてもこのような結論となる。現代科学の調査結果を直視すればこの結論以外にない。ここから、法隆寺研究は新たな段階に入ることになった。「法隆寺」へ移築された寺とはどこにあった寺なのか。この問題に答えたのが米田良三氏である。氏の見解では、その寺とは太宰府の観世音寺である。（「法隆寺は移築された一大宰府から斑鳩へ」）

しかし、米田説には多くの反論が出されている。結論的にいえば、移築寺は観世音寺ではない。では、どの寺が移築されたのか。反論者にも、具体的な答はない。

果たして「法隆寺」はどこにあった寺が移築されたのか。誰が、いつ、何のために移築したのか。また、移築された寺は誰が建てたのか。本来の法号は何といったのか。これらの本質的な問いに答えていかなくてはならない。

これらの謎の解明の道筋は「法隆寺」の本尊から始めるのが筋である。寺の命は本尊にある。本尊解明こそが寺の解明につながる。

本尊「薬師如来像」



「法隆寺」金堂には「釈迦三尊像(国宝)」、「薬師如来像(国宝)」、「阿弥陀三尊像(重文)」が座す。「阿弥陀三尊像」は鎌倉時代の作であるから、元々の本尊ではない。従って、「法隆寺」の本尊というべきは「釈迦三尊像」と「薬師如来像」の二つである。「薬師如来像光背銘」には「金銅薬師佛造像記」が書かれている。

金銅薬師佛造像記

池邊大宮治天下天皇大御身勞賜時、歳次丙午年、召於大王天皇与太子而、誓願賜、我大御病大平欲坐、故将造寺薬師像作仕奉詔、然當時崩賜、造不堪者、小治田大宮治天下大王天皇及東宮聖王、大命受賜而、歳次卯年仕奉

池邊の大宮に天に下を治(し)らす天皇、大御身勞(いたつ)き賜う時、歳は次丙午年(586)、大王天皇と太子を召して、誓願し賜う、我が大御病、大平ならむと欲(おも)い坐す、故、将に寺を造り、薬師像を作り仕え奉らむと詔す、然るに、時に當りて崩じ賜い、造り堪えざれば、小治田大宮に天の下治らす大王天皇及東宮聖王、大命を受け賜いて、歳、次卯年(607)仕え奉る

「池邊の大宮に天の下を治(し)らす天皇」が病気になられた。そこで、「天皇」は586年、回復を祈願して、寺と「薬師佛」を作ろうとされた。しかし、実現しないまま亡くなってしまった。その後、「小治田大宮に天の下治らす大王天皇」と「東宮聖王」が、そのご遺志を受け継がれて、607年に「寺」と「薬師佛」を造られた。

- (1) 607年に「法隆寺」と本尊「薬師仏」が造られた。
- (2) 造営した人物は「小治田大宮に天の下治らす大王天皇」と「東宮聖王」である。「大王天皇」という呼称は「伊予風土記」にも見られる。これは「大王」と「天皇」の二人の人物が存在するのではない。「大王」と「天皇」の二つの敬称を重ねて、一人の天皇を表している。
- (3) 「法隆寺」の本尊は「薬師佛」である。

ほぼ、同様の縁起が「法隆寺伽藍縁起并流記資財帳」にもある。

金湔銅薬師像奘具
右奉為池邊大宮御宇天皇
小治田大宮御宇天皇
并東宮上宮聖徳法王、
丁卯年敬造請坐者

金湔銅薬師像奘具
右、池邊大宮に御宇しし天皇の為に
小治田大宮に御宇しし天皇
並び(なら)びに東宮上宮聖徳法王、丁卯年に敬造し請
丁卯年に敬造し請い坐す者

「池邊宮の天皇」が病気になり、平癒を祈って、「小治田宮の天皇」と「東宮上宮聖徳法王」がこの金湔銅薬師像を造った。「光背銘」も「資材帳」も「法隆寺」の本尊は「薬師如来」であると説明している。「法隆寺」が607年に建立された時の本尊は「薬師如来」だったということである。

「薬師如来像」は、実は、「釈迦佛」

「法隆寺」の本尊として作られたのは「薬師如来」である。では、「光背」に「薬師如来」と記されている「法隆寺」の「薬師如来像」は真に「薬師如来」なのか。

この仏像が「薬師如来像」であるとされるのは不思議なことである。なぜなら、「薬師如来像」と云われるにもかかわらず、薬壺を持たない。同じ、「法隆寺」の大講堂の「薬師三尊像」と比べてみれば一目瞭然である。大講堂の247cmの「中尊」は左手に薬壺を持つ。

飛鳥佛三体は、釈迦佛

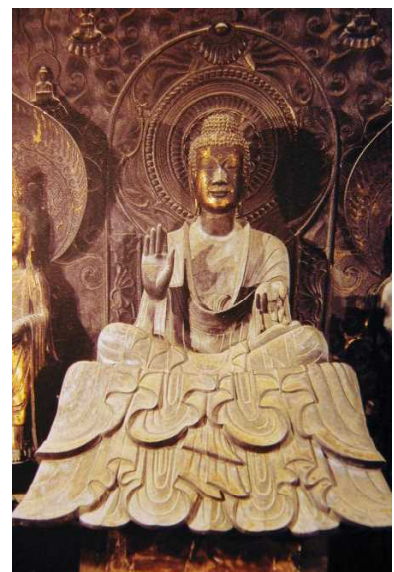
ここで、「法隆寺」の「薬師如来」と「法隆寺」の「釈迦三尊像」と「安居院」の「釈迦如来像」を比較してみよう。



釈迦如来像(安居院)
605年、609年敬造



薬師如来像(法隆寺)
607年敬造



釈迦三尊像(法隆寺)
622年上宮法皇没後、敬造

「法隆寺薬師佛」と「法隆寺釈迦三尊佛」と「安居院釈迦如来像」はほとんど同じ姿をしている。印相は全く同じである。衣については、「法隆寺薬師如来像」と「釈迦三尊像」は全く同じである。しかし、「安居院釈迦如来像」は少し異なる。だが、この仏像は頭部上部だけが元の姿で、それ以外は全て後に修復されたものだと言われる。原型の衣は「釈迦三尊像」、「薬師如来像」と同じだったと思われる。

この三体はいずれも「金銅佛」で、制作年代は、ほぼ同じ、580年から600年代初頭である。作者は同じ仏師であろう。作者の名前が記録されている仏像は「釈迦三尊像(法隆寺)」の光背である。そこには「止利仏師」とある。

「法隆寺薬師如来像」は「薬師佛」とはいえない。「安居院釈迦如来」、「法隆寺釈迦三尊」と同じ、「釈迦佛」である。「法隆寺薬師如来」が「薬師佛」であるという記しているのは「薬師如来」の光背銘である。ということは、この光背銘がまちがっているという事になる。「法隆寺薬師如来」は真に素晴らしい金銅釈迦佛である。当然のことながら、光背には造像記があったと思われる。だが、その造像記は削り取られ、現在の造像記が刻まれたのであろう。

では、もう一つの本尊、「釈迦三尊」に問題解明の糸口はあるか。

本尊「釈迦三尊像」



「上宮法皇」の生き写しである法隆寺
「釈迦三尊佛」

「法隆寺」のもう一つの本尊は「釈迦三尊像」である。この「釈迦三尊像」も元々の「法隆寺」の本尊ではない。他所の寺から持ち込まれたものである。

現在の「法隆寺」は別の場所にあった寺が移築されたものである。むろん、その寺は廃寺などではなく、生きた信仰の寺であった。現在の「法隆寺」の金堂、五重塔の様式美、荘厳さ、その規模から考えて、当時、日本最大、日本最高の寺だったであろう。現在も、また、当時も、この寺は世界最高の木造建築だったのである。

その寺が焼失した「若草伽藍」の隣に移築されて、新しい「法隆寺」として再興された。その際、「金堂」、「五重塔」、「中門」、「回廊」が移築された。

しかし、「法隆寺」には本尊が存在しなかった。よって、「寺」と俱にその寺の「佛」も一緒に運ばれた。それが「釈迦三尊像」である。

「釈迦三尊像」の光背銘には堂々たる漢文で、この仏像の造営目的が記されている。

法興元三一年歳次辛巳十二月鬼前太后崩明年正月二二日上宮法皇枕病弗愈干食王后
仍以勞疾並著於床時王后王子等及與諸臣深懷愁毒共相發願仰依三寶當造釈像尺寸王身
蒙此願力轉病延壽安住世間若是定業以背世者往登浄土早昇妙果二月二日癸酉王后
即世翌日法皇登遐癸未年三月中如願敬造釈迦尊像并俠侍及莊嚴具竟乘斯微福信道知識
現在安穩出生入死随奉三主紹隆三寶遂共彼岸普遍六道法界含識得脱苦縁同趣菩提
使司馬鞍首止利佛師造

法興の元より三十一年(621)、歳次未巳十二月、鬼前(かむさき)太后崩ず。明年(622)正月二十二日、上宮法皇、病に枕して、愈(こころよ)からず。干食し(食べ物を受け付けず)、王后、仍(よ)りて以て勞疾し、並びに、床に著く。時に王后、王子等、及び諸臣、深く愁毒(うれい)を懷(いだ)き、共に相發願(ほつがん)す。三宝を仰ぎ依りて、當に尺寸王身の釈像を造るべし。此の願力を蒙(こうむ)り、病を転じ、寿(よわい)を延べ、世間に安住せんことを。若(も)し是れ定業(前世からの定め)にして、以て世に背かば、往きて浄土に登り、早く妙果(みょうか・悟り)に昇らんことを。二月二一日、癸酉、王后即世す。翌日法皇、登遐す。癸未年(623)、三月中(に)、願の如く、釈迦尊像并(なら)びに狹侍及び莊嚴の具(光背と台座)を敬造し竟(おわり)ぬ。斯(こ)の微福(みふく)に乗(よ)り、信道の知識(道を信じる施主)、現在には安穩にして、生を出でて死に入らば三主(鬼前太后・上宮法皇・王后)に随(したが)ひ奉り、三寶を紹隆(しょうりゅう)し、共に彼岸を遂げ、六道に普遍(輪廻)する法界(宇宙)の含識(衆生・人々)も、苦縁を脱するを得て、同じく菩提に趣かん。使司馬・鞍首止利佛師、造る。

「釈迦三尊像」の光背銘には、この仏像造営の目的が刻まれている。

此の願力を蒙(こうむ)り、病を転じ、寿(よわい)を延べ、世間に安住せんことを。若(も)し是れ定業(前世からの定め)にして、以て世に背かば、往きて浄土に登り、早く妙果(みょうか・悟り)に昇らんことを。

「釈迦三尊」は「上宮法皇」の病氣回復を願って作られた。だが、もし、寿命が尽きて亡くなるのであれば、浄土で悟りをえることを願うと。

上宮法皇

「上宮法皇」とは誰か。仏教導入を巡る国内戦を勝利に導き、「法興」元年(591年)に即位、「法興32年」(622年)2月22日に亡くなった日本國天皇家の天皇である。推古朝の摂政「聖徳太子」として伝えられる人物はこの天皇である。

宮内庁が所有する「聖徳太子自筆の法華經義疏」の最初の頁には「大委國上宮王私集非海彼本」と書き付けた張紙を読むことができる。(「飛鳥と奈良」世界文化社 p71参照)

ここでは「上宮王」と書かれている。この「疏」とは帝説に、「慧慈法師賣上宮御製疏還帰本国」と書かれている「上宮法皇」の手作りの写本「疏」であろう。「法華義疏」は「上宮法皇」が自ら写本した「法華義疏」である。高麗僧慧慈はその一部を持って帰ったと言われる。

「薬師佛・光背銘」「釈迦三尊・光背銘」「天寿國曼荼羅繡帳」「法起寺塔婆露盤銘」「法隆寺伽藍縁起并流記資財帳」「大委国上宮王私集非海彼本」の全てに関係するひとりの人物、「東宮聖王」・「上宮聖徳法王」は仏教に帰依した日本國の天皇であった。

「大委国上宮王私集非海彼本」には國名が「大委國」とかかれている。日本國天皇家の公式な国号は「大委國」だったということになる。海外の史料には「日本」という国号が現れる。この「日本國」とは唐や百済、新羅、高句麗から見て「日の本」、つまり、東に存在する國といういわば通称であろう。

正式の国号は「大委國」であった。「上宮王」は自国を「大委國」と自書した。だが、なぜ、國名は「大委國」なのか。中国史書に登場する國名は「倭國」である。「倭國(キコク)」とは「姫氏」の國であることを表明する国号である。「姫氏」は古代中国・呉の王家一族である。祖国滅亡後、王「忌」に率いられて九州に渡来してきた。よって、その國を「忌國」といった。「忌國」とは「倭國(キコク)」である。

関西に実在した日本國天皇家は「大委国」と自称していた。「大委国」とは「大倭国」である。九州の「倭國」に対して関西の「倭國」は大国であった。静岡以西の西日本をほぼ支配下に置いていた。従って、「大倭國」と自称したのであろう。

「上宮法皇」の國「大委国」も、紀元前5世紀、九州に渡来してきた「姫氏」一族が建国した国家だったのである。「姫氏」は弥生人である。九州の「委奴國(吉野ヶ里遺跡)」から瀬戸内海を東進し、関西に上陸、当時の支配国家である縄文国家を滅ぼし、新しい弥生国家を建設した。関西に存在した日本國天皇家のルーツも「姫氏」だったのである。故に、姫氏の初代王「忌(姫)」の名をとって「大委国」と名乗っていたのである。

神武を始祖とする「九州天皇家」も「姫氏」の王「阿米」一族を祖とする。「九州天皇家」と「日本國天皇家」は

「姫氏」の縁によって繋がっていたといえよう。

奈良盆地の南平野を流れる川は一つの大河となり、斑鳩町の南を通して大阪柏原市に流れ出て、南河内を横断して大阪湾に流れる。かつて、大和川は大阪湾に流れ出ず、北流して河内湖に注いでいた。この大和川流域には発達した文明が存在した。大阪南河内と奈良飛鳥である。いわば、「大和川文明」とでもいえる古代文明が存在した。その文明を創造した國家が「大倭國(日本國天皇家)」であった。

日本書紀は、この天皇について高麗僧、慧慈の言葉を載せている。

日本國に聖人有(ま)す。上宮豊聡耳(かみつみやのとよみみ)皇子と曰す。固(まこと)に天に縦(ゆる)されたり。玄(はるか)なる聖の徳を以て、日本國に生(あ)れませり。

日本書紀での名前は、「上宮豊聡耳(かみつみやのとよみみ)皇子」である。一方、「上宮聖徳法王帝説」では「上宮聖徳法王」である。「法王」とは仏に帰依した天皇への敬称である。慧慈法師は、「逢上宮聖王必欲所化」「必聖王面奉浄土」と、「上宮聖王」「聖王」と呼んでいる。「聖王」も佛に帰依した王への敬称である。

日本書紀の「皇子」という呼称は、日本書紀の大義名分(近畿天皇家の大義名分)に基づく。日本國天皇家では「上宮法皇」が一般的な敬称であった。「上宮法皇」とは、「法隆寺・釈迦三尊」の光背銘に刻まれた「上宮聖徳法皇」である。

「法隆寺・釈迦三尊」光背の「上宮法皇」とは日本國天皇家の天皇であった。その治世、法興年間は591年から622年である。「釈迦三尊像」は、621年に亡くなった「太后(上宮法皇の母)」と、622年、病気になった「上宮法皇」の回復を願って「王后(上宮法皇の妻)」が発願した。そして、「上宮法皇」と「王后」が相次いで亡くなった622年の翌年に造られた。「釈迦三尊佛」は「上宮法皇」と「太后」と「王后」の三人の姿を表している。「釈迦三尊」という名であるが、実は、「上宮法皇」「王后」「王后」である。

- (1)「上宮法皇」と「王母」「王后」の死後、「釈迦三尊佛」が造られた。
- (2)「上宮法皇」の治世は、「法興元年(591)～法興32年(622)」である。「法隆寺・五重塔」の中心柱の伐採年は594年である。従って、「移築寺」が建築されたのは「上宮法皇」の治世である。その寺の施主は「上宮法皇」であろう。故に、「上宮法皇」の死後、「釈迦三尊佛」が作られ、その寺に祀られたのである。
- (3)「上宮法皇」が建立し、「釈迦三尊佛」が祀られていた「寺」こそが「法隆寺」に移築された「寺」である。

このような判断が最も妥当であろう。「上宮法皇」は仏教を理念とする国家建設を目指して寺を建てた。では、「上宮法皇」はその寺にどんな名前を付けていたのであろうか。「上宮法皇」は物部氏との激しい内戦の末、仏法を興した。故に、元号を「法興(仏法を興す)」としたのである。その国家事業が寺の建造であった。もちろん、寺には建物だけでなく、「佛舍利」「本尊」が存在した。

この寺は、高麗僧・慧慈が、「上宮法王は三宝を恭(つつし)み啓(い)やまひて、黎元(おほみたから)の厄(たしなみ)を救ふ」と、述べた寺である。「上宮法皇」は人々の救済を祈願してこの寺を造った。「人民救済という政治理念」、「元号法興」、「仏法を興す」等、これらを繋ぐ時、自ずと、「謎の寺」の名前も浮かび上がる。「上宮法皇」が建立した寺の法号は、「仏法を興す」という意味を込めた、「法興寺」以外にない。これが私たちの推論である。

果たして、そのような寺が実在したのか。

「移築寺」は「法興寺」 発掘された「法興寺」

「法興寺」が建立された場所は、当然、首都である。平城京に於ける「西大寺」「法華寺」等は全て首都の中心に建てられている。同じように、「法興寺」も首都に建造されたであろう。「法興寺」の施主、日本國天皇家「上宮法皇」の王都は「飛鳥」である。「飛鳥」の北400mの処に、「飛鳥池遺跡」が発掘された。これは工房跡であるが、そこからは金銀を素材とした、仏具・建築金物・工具・武器・ガラス工芸品・漆製品・瓦などが出土した。ここは当時の日本國の第二次産業地帯であった。また、そこでは通貨「富本」銭も鑄造されていたことが確認されて

いる。

「法興寺」は都、「飛鳥」の中心に建築されたとされる。では、「飛鳥」に大寺(跡)があるか。飛鳥には「川原寺」がある。また、「安居院(あんごいん)」もある。この二つのどちらかが「上宮法皇」が建立した「法興寺」であろう。

現在の明日香の「安居院(あんごいん)」は新しく建てられた寺である。かつて、そこには「飛鳥寺」が存在した。その発掘調査が昭和31年、32年に行われた。梅原猛氏が解説している。

法興寺は、今は飛鳥寺という。幾度か兵火にあい、古い伽藍は焼失し、推古時代の遺物として、わずかに当時つくられたという仏像の顔の上半分を残すのみである。体全体と顔の下半分は後世つくられたものである。この飛鳥寺が昭和三十一年と三十二年の二回にわたって発掘された。その結果、驚くべきことがわかった。それは予想に反して高句麗様式であった。つまり寺は北面し、中門を入ると塔があり、その塔を三つの金堂、つまり東金堂、中金堂、西金堂が囲む型である。この様式は、高句麗の清岩里廃寺とほぼ同じ様式であった。 (「仏教の勝利」小学館)

この「飛鳥寺」こそが「法興寺」である。「飛鳥寺」という寺名は「飛鳥」という地名に由来した名前である。法号は「法興寺」である。「安居院」の敷地には「法興寺」が埋もれていた。「上宮法皇」が建てた寺は現実に飛鳥に存在した。その名前も「法興寺」である。「法興寺」がどのような寺だったのか、私たちは、明日香安居院の本堂に掲げられている復元図に見ることができる。誠に美しい寺である。

- (1) 法興寺は日本國天皇・上宮法皇の治世、「法興」の代に、仏教国・日本の象徴として飛鳥に建立された。
- (2) 法興寺は594年の寺材伐採に始まり、以後建造された。
- (3) 「上宮法皇」の没後、「釈迦三尊佛」が作られた。その「釈迦三尊佛」は「法興寺」のいずれかの金堂に祀られていた。
- (4) 「法興寺」は、「塔」と「三金堂」を持つ高句麗様式の寺だった。「法隆寺」再興の時、「法興寺」の北金堂、五重塔、中門、回廊が移築された。同時に再興「法隆寺」の本尊として「釈迦三尊佛」が移された。



法興寺の本尊は「安居院」の「釈迦如来」

「法興寺」は三金堂、一塔の伽藍であった。故に、本尊は三体あったと思われる。「法興寺」・本尊はいかなる仏像だったのか。一体は「救世観音」であろう。では、残り二体は何か。

現在、「法隆寺」金堂には「金銅釈迦三尊像」、左に「金銅阿彌陀如来像」、右に「薬師如来像」がある。「阿彌陀如来像」は鎌倉時代の作であるから、当時の本尊ではない。また、「釈迦三尊像」は「法興寺」の本尊というべき佛ではない。「上宮法皇」の死後に造られたもので、「法興寺」の本尊ではない。中金堂に安置されていた「法興寺」の本尊とは現存するのか。

元興寺・縁起の「丈六釈迦像」

日本書紀には「元興寺」が紹介されている。「元興寺」は「法興寺」と同じ寺であると考えられている。「元興寺」には「丈六釈迦像」があった。その「釈迦像」の光背には、次のような銘があったと伝えられている。

十三年(605)歳次乙丑四月八日戊辰、銅二万三千斤、金七百五十九両を以て、敬(つつし)みて、尺迦丈六像銅繡二體並びに挾侍を造りたてまつる。高麗の大興王方に大倭と睦あり。三寶を尊重して、遙かに以て随喜し、黄金三百二十両をもって大福を助成し、同心結縁す。願はくは慈の福力を以て、登遐(うませし)の諸皇遍(ひと)へに含識に及び、信心有りて絶えず。而(そのあたり)に、諸佛を奉(あお)ぎ、共に登菩提の岸に登り、速かに正覺を成さむことを。歳次戊辰、大隋國の使主鴻臚寺(こうろじ)の掌客(つかさ)裴世清、使副尚祠部主事の偏光高(へんこうこう)来りて之を奉る。明年己巳(609)四月八日甲辰、畢竟(つくりお)へて元興寺に坐します。

(「元興寺縁起所引」塔露盤銘と丈六光銘について 飛鳥寺山本宝純)

この光背銘には明らかな誤謬がある。

「大隋國の使主鴻臚寺の掌客、裴世清」

これはまちがいである。隋の國使の名前は「文林郎裴清」である。それは次の二つの文献で明らかである。

隋書第81卷列伝東夷倭国

明年(大業4年、推古16年・608)文林郎裴清使於倭国

三国史記卷27・百濟本紀

武王九年(大業四年)使を遣わして隋に入り朝貢す。隋の文林郎裴清、使を倭国に奉じ、我が国の南路を経たり

隋書と百濟本紀武王の二つの史書が、隋の國使の名前を「裴清」とであると記している。「元興寺」縁起は次のように訂正されるべきであろう。

- (1) 大業4年(608)年の隋使は文林郎裴清であった。
- (2) 隋使文林郎裴清は大倭(日本國)に来た。
- (3) その時、高麗・大興王が託した黄金320両を持ってきた。

「大倭」とは関西の日本國天皇家をさす。日本國天皇家と高句麗との間には深い親交があった。日本書紀にその記録がある。

日本書紀・推古16年(608)夏四月、小野臣妹子、至自大唐。々国號妹子臣曰蘇因高。即大唐使人裴世清下客十二人、從妹子臣、至於筑紫。難波の吉士雄成を遣わして大唐の客裴世清らを召す。唐の客のために、また新しき館を難波の高句麗館の上に造る。

この日本書紀にも混乱が見られる。年代と本文が一致しない。「推古16年(608)」の中国王朝は隋である。ところが、本文の内容では、小野妹子は「遣唐使」として唐に渡っている。その目的は唐建国の祝賀である。遣隋使も遣唐使も、建国祝賀と中国皇帝即位祝賀を目的として派遣されたのである。

小野妹子は日本國天皇家からの唐建国祝賀使として皇帝に拝謁した。それは当然、唐建国の後である。小野妹子は第一回遣唐使として唐に行った。従って、その時期は、唐建国後の619年となるであろう。

日本書紀の遣唐使小野妹子は「推古27年(619)」と改めなければならない。小野臣妹子が帰国する時、唐は大使「裴世清」を日本國天皇家へ同行させた。日本國天皇家は、この時、唐から初めて使者を受け入れることになったので、大阪難波の高句麗館の隣に新しい迎賓館を造ったのである。難波にはすでに高句麗館があった。高句麗の大使の為の迎賓館が既に存在してたということは、高句麗と日本國との間には國使が往来していたのである。

話を「元興寺」縁起に戻そう。「元興寺」縁起には「尺迦丈六像敬造」の記録がある。「元興寺」の「尺迦丈六像」の敬造は、605年、609年と記されている。何故、605年と609年の二つの年があるのか。

「元興寺縁起所引・塔露盤銘と丈六光銘について」の中で飛鳥寺、山本宝純氏は次のように解析している。

- ① 605年、「元興寺」本尊「尺迦丈六像銅繡二體」並びに「挾侍」を造った。この時は、銅2万3千斤で鑄成の完成だった。
- ② 609年、「丈六釈迦佛」を造り終えて、「元興寺」に安置した。この時は「高麗大興王」から贈呈された黄金320両を使って、「丈六釈迦像」を鍍金し完成した。そして「元興寺」に安置した。

「605年」と「609年」の意味は、山本氏の指摘の通りであろう。金銅仏を作るには、銅で仏像を作ることと、水銀を使って鍍金することの二つの行程が必要である。日本書紀が記すように、「法興寺」の本尊、「尺迦丈六像」は銅像がまず、605年に作られた。そして、鍍金が609年に完成した。

- (1) 法興寺は600年に伽藍を造り終えた。
- (2) そこから、本尊「丈六釈迦像」を作り始め、605年に銅像が完成した。
- (3) 銅像に鍍金する工程が始まり、609年に完成した。

「法興寺」の本尊は「安居院」の「釈迦如来像」

「安居院」本尊「釈迦如来像」こそが「上宮法皇」が国力を挙げて建造した大伽藍「法興寺」の本尊佛であった。この本尊敬造には、銅二万三千斤(約14トンと云われる)、黄金七百五十九両(約30kgと云われる)が使われたと、「元興寺縁起」に記録されている。黄金に輝く堂々たる釈迦佛だったであろう。

考えても見てください。「上宮法皇」の時代に仏教が初めて百済から日本國に伝わってきた。人々は仏像を見たこともなかった。ところが、日本國の都、飛鳥に五重塔を中心に中金堂・西金堂・東金堂の大伽藍が建立され、中金堂には人々の身の丈を遙かに超える黄金の釈迦像が安置されている。釈迦佛は陽を浴びて光り輝いた。まさに、釈迦が到来したかのように思えたことであろう。

東大寺大仏は世界一の大きさである。確かに、驚きではあるが、この驚きはその大きさの所為である。しかし、「法興」の時代に、天皇、「上宮法皇」が敬造した「丈六釈迦佛(飛鳥寺釈迦如来像)」は人々が初めて目にする異形の仏像だった。

推古天皇、無遮の大会を設ける夕時(推古天皇四年)

本尊より光明を放ち、空には紫雲、花蓋の如くたなびき、塔堂を覆い、変じて五色の龍鳳の形となつて西に向かって去る。諸人群集し、奇異の思いをいたす。太子曰く「この寺天に感ず。瑞祥あり」と
(飛鳥寺古縁起)

本尊が光明を放ったのも当然であろう。黄金に輝く釈迦佛であった。諸人は信じたことであろう。この黄金の釈迦佛が私たちを苦しみから救ってくれる。この驚き。この感動。この信仰。この畏敬。まさに衝撃だったのではないだろうか。

日本書紀には、「法興寺」の本尊、「丈六釈迦像」に関する有名な逸話がある。仏閣を作ったが、丈六の仏像が入らなかった。金堂の戸を壊して入れようと誰もが考えた時、「鞍作鳥」が入れたというものである。「丈六釈迦像」とは「安居院」の「釈迦像」である。金堂とは現在の「法隆寺」金堂である。この説話の主役の二つは現存す

る。なお、「止利仏師」と「鞍作鳥」は同一人物である。「止利仏師」は「法隆寺釈迦三尊光背」に作者名として残ってる。「鞍作鳥」は日本書紀に登場する名前である。この二人は別人ではない。よく似た名前の人物が二人いたのではない。同一人物である。実名は「止利仏師」であるが、日本書紀編者は実名を知らなかった。よって、彼らは、通称名である「鞍作鳥」で記録したのである。

本尊「釈迦如来像」は飛鳥に残された

「法興寺」の「中金堂」「舍利塔」「回廊」「中門」は解体され、斑鳩に移築され、「法隆寺」として再興された。再興「法隆寺」の本尊として、「法興寺」に祀られていた「釈迦三尊像」が運ばれた。では、「法興寺」の「中金堂」の本尊「丈六釈迦佛」、「本尊より光明を放ち、空には紫雲、花蓋の如くたなびき、塔堂を覆い、変じて五色の龍鳳の形となって西に向かって去る。」と人々が驚愕した本尊、「丈六釈迦佛」はどうなったのであろうか。

「中金堂」はもはや移築された。だが、「丈六釈迦佛」は斑鳩へは運ばれなかった。「丈六釈迦佛」は「法興寺」の「中金堂」が解体され、移築された後も、そのまま、台座に残された。その理由は不明であるが、野ざらしのまま、飛鳥に残されたのである。この「丈六釈迦佛」が、現在、飛鳥「安居院本堂」に鎮座する「飛鳥大仏」である。「飛鳥大仏」はその台座から一度も動いた形跡がないと云われる。だが、この金銅釈迦佛は、当時、黄金七百五十九両を使って敬造された大金銅釈迦佛である。野ざらしにしておくことはできなかったのであろう。仏の為に新しい寺が建てられた。その寺が「元興寺」だったのではないだろうか。ゆえに、「丈六釈迦佛」が「元興寺」の本尊として伝えられたのである。

ところで、「元興寺」という寺号は「元は法興寺であった」ことを暗示しているように思える。しかし、その「元興寺」も移築され、釈迦如来像は無惨な形で放置された。

室町時代に入って、雨ざらしとなり、大仏には金がいっているとの噂から盗賊に腰の部分をこわされて、ひどいありさまになったことが記録にのこっている。（「飛鳥寺」坪井清足著）



飛鳥、「安居院」
釈迦如来像

「法興寺」の中金堂の本尊、「釈迦像」が辿った運命は過酷なものであった。現在の姿に見るように、頭部の上部だけが敬造当時のもので、残りは全て後代の修復である。

衣一つとっても悲しいばかりの修復である。室町の戦火を経たのは、むしろ、「法興寺」本尊だけではない。多くの仏像がその戦火の被害にあったと思われるが、「法興寺本尊」釈迦佛のように、体が削り取られた仏像は他にもあったであろうか。

「法興寺」釈迦佛は日本最初の金銅釈迦佛である。日本の数多く存在する仏像の中で、最初に敬造された金銅佛である。いわば、国家の至宝ともいべき仏像である。この仏像をもって日本の仏教は出発したのである。手厚い保護があつて当然である。それが、頭部上部を除いて全て元の姿ではないとは、この仏像が持つ政治的な存在意義の大きさを暗示しているように思える。

「法興寺」本尊の本来の姿はどうだったのでしょうか。光背を背負い輝く大釈迦佛はどのような姿だったのでしょうか。その姿を彷彿させる仏像がある。制作年もほぼ同じと伝えられる「法隆寺」の「薬師如来像(実は、釈迦佛)」である。気品溢れる像高63.8cmの「法隆寺」薬師如来を約四倍の大きさに拡大してみましょう。

「法興寺」本尊の黄金の釈迦佛がいかにすばらしい仏像だったか。

